
【黒い天使の笑】

愛実 三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【黒い天使の笑】

【Nコード】

N4115J

【作者名】

愛実 ム

【あらすじ】

黒い天使。白い悪魔にあつた者の前に十年後、必ず姿を現す。そして、死んだ者からの心を伝え、生と死を与える。死を与えた者には嘲笑うかのように、生を与えた者には微笑むように笑う黒い天使。【白い悪魔の涙】に続く黒い天使のもう一つ物語。―あなたは生きるべきか、死ぬべきか―

第一章 兄との約束（前書き）

白い少女が黒い少女の隣でまた泣いていた。

「イフ、そろそろ時間だね。ちょうど十年。」

「あの子はどつするの、イズ。」

白い少女は尋ねた。

「まだ分からないわ。どつちにしろ、いつか死ぬんだけどね。とりあえず、あの子のお兄さんからの心、伝えてこないと。」

「うん。」

白い少女は小さくうなずいた。

黒い少女は真っ黒な羽を広げて飛びかった。

第一章 兄との約束

黒い天使。

残酷なほど美しく花開く黒い天使。

また今日もどこかで笑っている。

また夏がきた――。

あの大嫌いな夏だ。

斎堂神楽。

現在26歳。

長かった髪はばつさり切って、顔も昔の憎しみの籠もった顔ではなく、時隆のように和やかな顔つきになっていた。

あれから十年がたっていた。

あの日、時隆が死んだ日から十年。

「あつという間だったよ。」

神楽は仏壇の上の時隆の写真を見て呟いた。

今も昔と変わらない時隆の笑顔。

ずっと笑ってる。

妹から愛情の代わりに憎しみを貰い。

それでも、時隆は笑って死んでいった。

「もう、あれから十年。私はどんどん年を積み重ねて行って、あなたは写真の中で昔のまま。」

今、神楽は医師の仕事に勤めている。

毎日、忙しい日々が続くが神楽は時隆のことを忘れたことは一度もない。

仕事の時は机に時隆の写真を置いておき、いつもその笑顔に励まされている。

今日もまた。

「……！」

神楽は振り返った。

誰かに呼ばれたような気がした。

「——誰……？」

気配が感じられる。

神楽はすつと立ち上がり玄関へ歩いていった。

玄関の扉を開けると朝の眩しい光が差し込んだ。

——。

また呼ばれた。

神楽は無意識に家を飛び出していた。

どこへ向かっているのか分からなかった。

ただ、何かが自分を導いているように感じられた。

そして、ある場所で足が止まった。

「ここは……………」

険しい森の前にそびえ立つ鳥居。

まるで、未知なる世界への入り口のよう。

昔、来たことがある。

『早くしろよ!』

『待つてー。』

……そうだ、あの日の夏――。

神楽は鳥居に足を踏み入れていた。

草や枝を掻き分け奥へ進んでいく。

何かが呼んでる。

小さな光が見えてきた。

出口だ。

バサアア

視界が急に広くなった。

光が眩しい。

そして、神樂の上にちらちらと何かが振ってきた。

「……花びら……。」

視線を上に向ける。

「わああああ………！」

見上げると、満開の桜の木がそびえ立っていた。

桃色の花びらが神樂の昔の記憶を運んできた。

『おい！神楽！早くこいよ！』

『待つてよ、お兄ちゃん！』

あの日も暑かった――

「ほら、早く！」

時隆は神楽を背に険しい道をどんどん進んでいく。

「はあ……早いよお……！」

神楽は息を切らしながら無我夢中で時隆を追っていた。

追い付くと時隆は空を指差した。

「見てみる！あれ！」

「……わああ！すごい！綺麗……。」「

「だろ？」

時隆は自慢げに鼻をすすった。

「この桜はな、開花が遅いから今の時期が一番綺麗なんだぜ。夏でも見れるってすげーだろ！」

「うん！ありがとうね！お兄ちゃん！」

神楽は無邪気な笑顔で走り回った。

それを嬉しそうに時隆は笑っていた。

「お兄ちゃん！また、連れてきてね！」

「ああ、約束だ！」

約束だ。

桜は絶えなく薄桃色の花びらを散らしている。

「兄さん……約束、守ってくれたんだ……。」

神楽は涙を流しながら、桜を眺めていた。

「ありがとう……兄さん……。」

神楽は笑顔で桜に向かって言った。

それを後ろで見ている少女がいた。

「伝えたわよ。あなたの心。あの子は生きるべきね。私に命を奪う

資格はないわ。」

そして少女はやさしく笑った。

黒い少女は笑った。

第一章 兄との約束（後書き）

「イズ、あの子、生かしてくれたのね。」

白い少女は笑顔で泣いていた。

「ええ。生きるべきだわ。お兄さんのためにも。」

黒い少女はやさしく微笑んだ。

* . . . *

第二章 黒い花と黒い母親（前書き）

白い少女と黒い少女がいた。

「……………」

「どうかしたの？」

黒い少女は俯く白い少女に寄り添った。

白い少女は夕日を見つめる。

「あの女を殺して」

白い少女は消えそうな声で言った。

「それは私が決めることよ」

「そう。でもあなたはきつと殺すわ」

「そうね」

黒い天使が飛び立った。

第二章 黒い花と黒い母親

波の音。

あの日から変わらないこの海。

少年と少女がいたときと変わらないまま。

一人の男が白銀の幼い少年の写真を持って波打ちぎわに立っている。

「……ぼっちゃま、綺麗でございますね」

独り言のように呟いて笑った。

精一杯笑った。

見慣れない風景。

あの海とは遠く離れたこの町。

一人の女がソファ―に座って外を眺めていた。

坂城ナウ。

あの坂城メアの母親。

メアを殺した本人。

その後、ナウは会社に復帰し社長まで駆け上った。

「これもあのwhite girl（白い少女）のおかげね」

ナウは満足そうに笑った。

その時、ドアの叩く音がした。

「What？」

ナウが振り向く前にドアが開かれた。

「Hello・Nice to meet you（こんにちははじめてまして）」

そこには真っ黒な少女が立っていた。

ナウは面倒臭そうに顔をしかめた。

「何？あなた」

「すごいですね。私が日本人だと気づくとは」

黒い少女は無表情のまま言った。

「何しに来たのかしら？white girl（白い少女）と関係がありそうね。Black girl（黒い少女）」

「そうよ、イフのこと覚えているのですね？」

「もちろんよ、メアが死んでからもう八年経つのね。あんな役立たずな息子でも役に立ったわ」

ナウはさり気なくウィンクした。

黒い少女はそれをなんでもないかのように見つめた。

「あなたは悲しい人ね」

「？」

「あなたは過去二つの命を奪ったわ」

黒い少女はまっすぐにナウを見た。

「メアの命と、その姉のサリナの命」

「そうね」

ナウは笑いながら目の前においてあるカップティに手を伸ばした。

「十年前にサリナを殺し、八年前にメアを殺した。あなたは自分のしたことをどう思っているのですか？」

「そうね、大成功だったわ。最初は少し迷ったけど、今になっては殺してよかったわ」

「違います。そのことはありません。メアとサリナのことをどう思っているかを聞いているんです」

黒い少女は静かに言い張った。

ナウは紅茶を口に含みながらうっんと唸る。

「そうねえ……別になんとも思っていないわ。むしろ”邪魔”だったかしらね。だから殺してよかったわ。邪魔者はいなくなっただし、会社の社長になれたし、一石二鳥ね」

「……そう」

ナウは笑って黒い少女を見た。

「ところで、あなたは何をしに来たのかしら？」

「私は天使のイズ。あなたを――」

殺しにきました」

黒い天使が笑って。

「散れ」

——真っ黒な花が咲いた。

とてつもなく残酷な真っ黒な花が。

坂城ナウ、飛び降り自殺。
動機、不明。

飛び散った真っ黒な血が花開いた。

「あなたは死ぬべき」

黒い天使は笑った。

心のない真っ黒な女の死を。

嘲笑つかのように。

第二章 黒い花と黒い母親（後書き）

白い少女が笑っていた。

「花が咲いたようね」

「黒い花よ」

「白い花は咲かないのかしら」

白い少女は面白そうに笑っていった。

「さあね」

*

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4115j/>

【黒い天使の笑】

2010年10月8日15時30分発行